

とある侍の一方通行・続

ゴッデス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

携帯ぶっ壊れてパスワードを控えてなかったアホな元ドREAMです。

これはとある侍の一方通行の続きです。

分からない方はドREAMのとある侍のくを検索して見てからだとわかると思います。

駄文ですが、よろしくお願いします！

目次

迫り行く絶望	1
化け物になっても、無理なものは無理	4
女王に打ち勝つには魔王が最適	10
訪れる日常	14
約束は破る為にある	25
能力者と魔術師の協力	31
悪党の護るもの	42
事が大きくなる前にとってとり早く済ませるのが一番	49
秘めた想いと迫るリミット	56
伝染した狂気	61

迫り行く絶望

目の前にいるの仮面を脱ぎ捨てた男は。

ニコリと笑っている彼の姿は。

昔、自分を拾ってくれた恩師そのものの姿をしていた。

銀時は言葉を発する事は出来なかった。高杉から吉田松陽は殺されたと聞いているからだ。

「な、んで生きてんだ……！アンタが死んだって俺はっ……！」

「ふふっ。銀時……貴方がこうして生まれ変わっているのだから、私が生き返るのも不思議ではないでしょう？」

動揺して叫ぶ銀時に松陽は平然と答えた。

「しかし、流石ですね。紅桜を破壊し、浜面仕上を死なせず、元の姿に戻したのですからね。もっとも木原数多を失ったのはこちらとしても、少々痛手になりましたが」

心理の膝の上で安らかに眠る木原数多をチラリと見ながら話す。

彼女は涙目でキッと松陽を睨みつけるが、彼はまたしてもニコリと微笑む。

「銀時の妹でしたか。また会いましたね」

「なんでよ……木原さんの次は銀兄？やめてよ……私から銀兄まで奪わないでっ!!」

彼女の悲痛の叫びに松陽には届かない。

「私の計画には銀時。貴方が必要なんですよ？白夜叉の力でこの世界……嫌、全てのパラレルワールドを崩壊させ、私達だけの世界を創る」つまりは全てを無に帰し、一から新しい世界を創り出すと言うもの。

その場全員が驚く。

松陽はさらにこう言う。

「それに私は貴方の知っている吉田松陽ではない。私は虚（うつろ）。吉田松陽と言う存在を葬ったのは私ですよ？銀時」

虚と名乗った者は衝撃的な事実を述べると、松陽と同じ顔で和かに笑った。

「テメエかああああああああああ!!!」

銀時は激昂し、突撃する。

「銀時!!」

また子が叫ぶが、虚と銀時がぶつかり合った瞬間だった。

それぞれの動きに合わせて刀同士の影響だけがこの場所を支配する。

「やはり、私の剣を知っているか…捌くには中々、骨が入りそうだ」

他の者達は加勢しようとするが、隙入れようがなくなただけその場を立ち竦む。

「虚オオオオオオオオオオ!!!」

銀時は雄叫びを上げ、更に剣を素早く振り上げる。

そこを見計らって虚は一気に銀時の懐に入り込む。

「ですが、その剣では……私には届かない」

右手を軽く彼の脇腹に当てるとドゴオ!!!と凄まじい音が響く。

「ガハッ!!」

軽く触れられただけなのに衝撃波のような威力に銀時は血を吐き、その場で倒れてしまった。虚は倒れた銀時に近づいていく。

「銀兄!!」

「銀時!!」

心理とまた子は叫んでそこに向かおうとするが、それを越すように何かを通り過ぎて、虚と銀時の間に割って入ってきた。

それは彼を護るように手を広げて立ち塞がる。

「おや？何のつもりですか？禁書目録」

涙目ながらも、しっかりと虚の目を見て睨みつけるインデックス

だった。

「いつの間にな?」

美琴は彼女が近くに居なくなっていたのを全く気づかないでいたのか驚いている。

「イン……デックス……」

うつ伏せになりながらも血だらけの顔を上げて前を見るとブルブルと震えながらも、虚と対峙する彼女の背中が映る。

「私は禁書目録に用はない。科学だとか、魔術とか、そんなものはいらないですよ。銀時…そして欲を言えば…高杉晋助、桂小太郎、坂本辰馬。嘗て、松陽と共にした三人と土佐の龍さえ手中に収めれば…こんなチンケな世界は簡単に壊れる」

銀時だけではなく、高杉や桂、そしてまだ見ぬ坂本までを手に入れようと言うのだ。

虚にとっては四人の力は強力であり、脅威でもある。

「っ!」

さらに一步、銀時とインデックスに近づく。それでも彼女は一步も引かずにその場を離れない。

そして虚が目の前まで到達すると、和かに話しかける。

「そこをどきなさい。禁書目録」

顔は笑っているが、ドス黒い殺気を纏っている為に誰も動けない。

「インデックス…早く……逃げろ」

途切れ途切れの声を聞きながら、その声の方向へと体を向ける。

そこには震えながらも笑みを絶やさない彼女の姿。

「ぎんとき! 貴方は、私に居場所を与えてくれた。だから私は貴方を護る為なら、何でもするんだよ!」

更にニコリと笑うインデックスの後ろには

「ならば邪魔になりかねないので、消えてもらいましょうか」

真つ二つに斬らんとする虚の姿が見えた。

「ヤメロオおおおおお!!!」

銀時は思いつき叫びあげ、そこで意識が途絶えた。

化け物になっても、無理なものは無理

二つある培養器の一つから警報が鳴り響いた。

それは打ち止めと呼ばれた司令塔が入っている方では無く、木原数多と呼ばれる研究者が造りだした第三位のクローン。

番外固体の入ってる方からだった。

芳川はそれを見て目を伏せた。

(……そう。貴方は最後の最期であの二人を選んだのね)

ホツとしたような、悲しいような、そんな感情が芳川にはあった。

「……オイ。どうなってんのか知ってんだろ? お前」

高杉は睨みつけながら言うと、目を開けて答える。

「この子が造られた理由は言ったわよね?」

「まさかっ! その男が作動させたのかっ!」

桂が激昂して芳川に問い詰めようとするが、高杉に止められる。

芳川は首を横に振り、悲しそうに高杉達を見た。

「他の理由があんだな?」

高杉がそう言うと言くと頷く。

「もう一つは……銀時と心理の二人の側に居させるために造れた存在でもある。もし、銀時を殺す為に作動させるのなら……番外個体はそれに反応して培養器をぶち破って出てきたでしょうね」

つまりは、彼女はコレの答えをハッキリと分かかってしまった。

「彼は……木原はあの二人を選んだ。悪党になりきれずに……ね」

(芳川あ、もし俺が二つ目の為にスイッチを押した時は……俺はこの世にいねえだろうな)

彼の人生は一度手放した大切なものを手放しきれずに護る事を決めた

「本当にバカな人ね。木原さん」

バカな人生だった。

芳川の目からは一筋の涙が溢れた。それを見たミサカ、高杉、桂は黙っていた。木原数多と言う男は、この世にいない事を記しているのを理解出来たからだ。

彼女はポケットから何かを取り出してこう言った。

「そして私もバカな女」

カチつと鳴らすと

ドオオオオオオオオンンンン!!!

「なっ?!?」

「芳川桔梗!?!何をしてるんですか!?!とミサカは芳川の行動に声を荒げます」

「テメエ…」

大きな音と共に研究所が崩れ始めた。この建物の中にいる奴らの悲鳴が響き渡っていく。

「貴方達の目的はあの恐ろしい刀の破壊よね?それなら…この場所にある。この建物さえ崩壊すれば解決するわ」

笑いながら培養器の側にあるパソコンを操作してロックを解除した。

すると二つとも開き、ドサツと打ち止めと番外個体が外に出される。

服も着ていない、全裸姿なのでタオルケットで包み込めると高杉達の方へと振り向いた。

「この二人を連れて逃げなさい」

「ふざけてんのか。テメエは」

自分も死ぬつもりなのだろう。そう感じとった高杉は反抗した。

「俺とツラはこの世界の人間じゃねえよ。だから一生、アイツといることなんざ出来やしねえ。なら、俺達が居なくなったら…誰がアイツらを支えんだよ?誰が此奴らを救えんだよ?そんな資格なんかねえとかほざくなよ。親と名乗った以上、死んだソイツの意思を引き継いでんなら、最後まで面倒見ろよ」

俯く芳川に近付き手を引つ張る。

「テメエは死なせねえ。アイツを悲しませねえでやってくれや」

そう言われた瞬間、小さかった銀時と心理が笑顔で迎えてくれる姿が一瞬、映った。

そしてまだ、闇に染まってなかった木原の優しい表情も。

「……そうね。そんな事も分からなかったなんて、とことんバカだったわ」

ミサカと桂も微笑む。

ミサカは打ち止めを桂は番外個体を背負い、崩れゆく中を高杉達は脱出する為に足を進めた。

垣根と信女はようやく周りの敵を全滅させて進んでいるが

「ああっ!!面倒クセエな!!此奴ら雑魚どもはどんだけ集まれば気が済むんだよっ!!」

返り血を浴びながら敵の数の多さにイライラしていた。

「つーか、アンチスキルとジャツジメントは何してんだよっ!!」

「一般人の安全保護と救出作業だと思うわ。…一応ここでは、アンチスキルに入ってるから」

俺らは一般人じゃねえのかとツツコミたくなつたが我慢した。

「ヤメロオおおおおお!!!」

その先で誰かの咆哮が聞こえてきた。

「…今の声は、銀?」

ピクリと声が聞こえていた信女は走り出した。

「……ちっ。得体の知れねえ力を感じやがる。嫌な予感しかしねえが」

行かないと言う手段はあり得ない。何故なら、垣根自身も銀時の事を少なからず気にしている為でもある。

「以前の俺なら、構わずに奴を殺す事しか考えてなかったっつーのに」
近くにいる度にそんな考えが馬鹿らしくなるほど、楽しいと思つて

しまった。

一瞬でもいい。ただの一般人でいられるのなら…それでもいいとさえ思ってしまった。

「坂田銀時に坂田心理か」

間違えなく垣根をこんな風にさせるのはこの二人以外、検討がつかない。

奴が白夜叉と呼ばれようが鬼と呼ばれようが

「この一瞬の時間を壊す奴らを、この俺がぶっ潰してやる」

この身が滅ぶまで全力で邪魔をする者を潰す。

垣根はそう決めた。

その矢先に見たものは

「ありやあ…一体、何だ？」

悪夢でも見ているような、垣根の悪い予感が的中した。そう当てるまる光景だった。

「おや？」

グシャ、と音がしたと思ったら、剣を振り落としていた腕が地面に落ちた。

目の前には、斬っていたであろうインデックスを護るように

漆黒の翼を生やし、漆黒の刀を持った銀時が立っていた。

「……………」

「ギ、ぎんときょ…」

ギラリとした真紅の瞳でニタニタと笑って、虚の片腕を吹き飛ばした銀時の姿に皆、声も出なかった。

「銀ちゃん的能力が暴走している……。それにあの刀…憎悪の塊のよ

うにものを感じます。早く止めないと危険すぎます!!」

風斬は銀時の能力が暴走していると感じ取り、あの漆黒の刀からとつともなく危険なものだと判断した。

「あれが…銀…なの？」

追いついた信女は銀時の姿を目撃すると信じられないと言った表情をしていた。

それよりも驚くのは虚の片腕がまた、生え始めている事にも信じられなかった。

「フッフ。凄いですね。これなら私を殺せるかな？」

その言葉と同時に黒い翼が虚と衝突した。

その翼は勢いよく虚と共に壁へと吹き飛ばし、何十、何百回とけたたましい音が響き渡る。

側から見れば圧倒的。絶対的な力を見せつける彼を止められるものはいない。

そう思っていた。

「銀時イイイイイイイイイイ!!後ろだあああああつ!!!」

垣根はゾワリ、と悪寒を感じて咄嗟に叫んだ。

普段、呼ばない名前を呼んで。

銀時はその声に無意識に反応して後ろを振り返る。

蒸気が溢れる場所からシューウウと虚の身体が再生されている。というあり得ない光景を目の当たりした。

「これでも私を殺せませんでしたか」

両方とも刀を突き刺す。どちらも肩に刺さり、その反動で退く。

しかし、虚の肩のキズがみるみる塞がっていく。

そして銀時の肩のキズもなくなっていた。

「ほう。その状態だと回復するみたいですね」

それでも銀時の方が能力的にも、体力的にもダメージがあつたのか翼が消え、黒い刀は木刀へと変わっていき

「……化け物が」

ドサツと倒れた。

「貴方こそ、充分な化け物ですよ。銀時」

そして銀時の方へと近づく。

「銀っ!!」

「銀兄イっ!!」

信女と心理がそれを阻止しようと走りだす。

「虚様」

それよりも先に笠を被った男が虚の目の前に現れた。

「…隴（おぼろ）」

信女は誰も聞こえないようにボソツと呟いた。

その男は、チラツと信女を見るとすぐに虚の方へと視線を戻した。

「紅桜は高杉晋助達により全滅したとの報告があり、引き際かと」

紅桜が全滅した。それを聞いても、なんの動揺もすることもなく笑っている。

「そうですか。もう少し楽しみたかったです…仕方ありませんね。全軍に撤退命令をだしなさい」

「はっ」

虚の命令に従う為、男はこの場から離脱した。

虚自身も刀を振り上げ

「では、暫しのお別れですが。また会う時を楽しみにしていますよ」

地面に突き刺すと粉塵が吹き荒れる。

視界が晴れると虚の姿はなかった。

浜面仕上は倒され、紅桜は殲滅したが

なんとも腑に落ちない終わり方で、この騒動の決着はついた。

女王に打ち勝つには魔王が最適

一週間後

「……以上で校長先生のお話は終わりです」

お嬢様学校と言われている常盤台中学。

その体育館で朝の全体集会が開かれていた。

美琴は小さな欠伸をして退屈そうにしている。

(あれから何も起きずに復興作業が始まっているけど……)

あの後、虚と言う化け物は一度も此方には来ていない。

美琴は思い返す。

(アイツのあの黒い翼と不気味なくらい恐ろしい刀は一体?)

風斬は能力の暴走と言っていたが、それだけではない気がした。

黒翼もそうだが、何といてもあの黒い刀は紅桜よりも悍ましい雰

囲気を漂わせていた。

美琴は少なくともそう感じていた。

それよりも。

(アイツと……心理さん、大丈夫かしら……?)

あの兄妹がとても心配だった。目の前で親代わりだった人が殺さ

れたのだから。

いくら強い二人でも精神的にやられているかもしれない、と。

だが、それはすぐに杞憂な事だったと思い知らされる事になる。

「えー。次に三年生にですが、この度から常盤台生徒として……転入生

を紹介します」

ザワつと周りが騒ぎ始めた。

(このタイミングで? しかも先輩……)

美琴はこのタイミングで、しかも三年生に入ってくる事に少し怪し
んでいた。

「決して無礼のないようにお願いします。それではどうぞ」

マイクで話している先生が少し緊張した風に紹介する。

それほど偉い所のお嬢様なのかとますます疑問に思っ
てステージの端から入ってくる生徒を見る。

た。

その瞬間、生徒全員が顔を真っ青にした。

うわあ、やっちゃったよ心理さん…

美琴は頭に手を当てて苦笑した。黒子は慣れていないのか冷や汗をかいて立っていた。

「それともう一つ」

彼女は更にこう続けた。

「美琴は私の妹みたいなもんだから、どこぞの第五位とか手エでしたら、塵一つ残らないと思ってるね？」

「わ、私が心理さんの妹っ!？」

美琴は妹扱いに戸惑いを隠せないでいるの対して

ビクツと跳ね上がるのは生徒と一緒に座っている金髪の少女。

「あらあ？その前に貴方を操るなんて、私にとって造作もない事なのよねえ」

負けじと掌でリモコンを弄んでいる少女が挑発的な笑みを浮かべる。

それがいけなかった。

「へえー？なら、貴方のリモコンで私を操るのが先か、私が刀ぶん投げて貴方の体を貫くのが先か…試してみる？心理掌握（メンタルアウト）の食峰操祈（しよくほうみさき）さん」

切っ先を少女、食峰に標準を合わせて狙いを定める姿は

まさに獲物を一発で刈り取る狩人だった。

「あ、へ…？あああ…」

黒いオーラ全開で心理は楽しそうに食峰を見つめると、耐えきれなくなつたのかパタリと気絶した。

「ふふっ。軽い冗談だったんだけど。何やともあれ、よろしくお願ひします皆さん」

（貴方が言うのと冗談に聞こえません、心理さん）

食峰が苦手な美琴はザマア、と心の中であざ笑っていたが

心理の態度に冗談とは言えないほどに冷や汗をかいていた。

ヒラヒラと手を振ってステージから去って行く彼女。

そして、シーンと静まり返る会場。

(これからどうなるのかしら…?)

新たなる常盤台の女王…いや、常盤台の魔王が君臨してしまったのだから、美琴はこの先の学校生活が不安で仕方なかった。

訪れる日常

心理が常盤台中学に入る五日前の事。

あの事件から二日が経って漸く、銀時は目を覚ました。

「っ?!インデックスっ!!」

確かインデックスが自らを庇って、そして

その後の記憶が全くなかった。

ガバツと起き上がって辺りを見回すと最近、お世話になった風景に見覚えがあった。

「病院…か」

そしてヤケに腹周りが重く、シーツを捲ると

「んー…むにゃ」

インデックスがくっついて寝ていた。ホッと一安心した。

隣にはカーテンで仕切りが出来ており、一人部屋じゃなかったのかと思っていると、シャーッとそこから開く音が聞こえた。

「ん、良かった。銀兄さん起きたんだ」

心理がニコリと笑う。そして銀時の腹で寝ているインデックスを見て

「インデックスね…ずっと泣きじやくりながら貴方の側に居るって聞かなかったのよ?だから特別…にね」

若干、黒いオーラが見えた気がしたが、敢えて気付かないフリをした。

羨ましそうにしている彼女を横目に銀色の髪を撫でた。

んー、と起き上がった彼女は痛つと背中を抑えながら窓際のカーテンを開けると強い陽射しが目に焼きつける。

「ねえ…木原さんはどんな想いで暗部にいたのかな?」

陽射しに映る心理の表情は今にでも泣きそうな表情だった。

銀時は暫くそれを見てから

「…さあな」

目を伏せて

「ただ言える事は、俺達を裏切ってまで家族（俺達）を護ろうとしてい

た：…最期まで俺達の家族であろうとした事は…十分に伝わったよ」
そう答えた。

「そっか…銀兄は私の前から居なくならないよね…?」

虚という存在がいる限り、心理の頭の中にはそれしかなかった。

もう一人にはなりたくない。

大切な物は失いたくない。

そんな風に銀時に訴えるかのように見つめている。

「言つたろ?俺あ、テメエから離れねえし手離すつもりもねえってな。

心理は一生かけても、必ず俺が護つてやらあ」

綺麗に笑った銀時にそう言い切られて、まるで告白でもされたかのように心理の顔は真っ赤になった。

「うう…そんな風に言われると勘違いするじゃない…」

「…何が?」

彼女がモジモジしながら視線を泳がせながら言う言葉に訳が分からない銀時は首を傾げた。

どこまで鈍感なんだコイツはと殴りたくなる衝動に駆られたが、グツと我慢する。

それでも彼女は満足した。彼は昔と変わらずにずっと護つてくれる。

だから自分も返してやる。

「護られるだけじゃ嫌だから、私にも貴方を護らせてね。それでこそ家族でしょ?」

こちらにも滅多に見せない、見惚れる程に綺麗な笑みを浮かべて銀時と視線を合わせた。

(あれええええええ?!?!心理ってこんな可愛かったつけ??ちよっ…銀さん、危うく妹に落されかけたんだけどっ!?!)

流石の銀時もそんな心理の表情に少し顔を赤くして動揺しながらも

「…ああ」

恥ずかしくなりながらも頷いた。

そこに一人、それを思わしくない者が銀時の腹の上にあった。

「むう…いつまで二人の世界に入ってるのかな？」

声が出た方を見ると、インデックスが目を開けて銀時を覗き込むように不満ありげに顔を上げていた。

銀時は頭を撫でながら、わりいわりいと笑って謝った。

この時の心理は嫉妬はなく、スッキリしたような気持ちで二人を見ていた。

そこで、ふと病室の扉の方へと目をやり

「どこの誰だか、知らねえが…盗み聞きとは随分な悪趣味だな」

自分達の部屋の外にいる誰かに話しかけた。

え？と二人も銀時の視線の方向へと見遣る。

観念したのか、扉を開けてその人物が入ってきた。

そこには

「何だ…テメエらか」

昔から見馴れた二人、高杉と桂がいた。

警戒を解き、一息ついた。

「フン…邪魔しちやあ、野暮つてもんだろ」

「うむ…貴様が新しい家族を手に入れていた事は俺としても、喜ばしい事だぞ」

二人の気遣いに銀時はフツと頬を緩ませた。

「紅桜は殲滅した」

「つつても、テメエらの親がやったようなもんだがな」

桂は紅桜を殲滅させたと言い、高杉は後ろをチラッと見て入ってこいと促していた。

そこに入ってきたのは

もう一人の親代わりとして自分達を見続けてきた、芳川桔梗だった。

心理は目を見開いたが、銀時は変わらない目で見つめていた。

「銀時…心理…」

二人の視線が芳川を射抜いた。

「芳川…さん」

心理は銀時達から離れてフラフラって彼女に近づこうとしたが、銀

時に止められた。

「銀兄さん……？」

「ぎんとき……？」

止められた心理は驚き、インデックスは不思議に彼を見た。

「おう……久しぶりじゃねーか。芳川さんよお」

余りにも低い声に冷めた目線で芳川を見ている銀時に二人は戸惑いを隠せないでいた。

「…銀時」

芳川は辛そうな表情で銀時の名前を呼んだだけだった。

「アイツが……こうなる事を知っていたんだろ？それを知っていてテメエは高みの見物でもしてたんだろ？それを今更、俺達の前に姿を現しやがって。一体、どういうつもりだ？」

「ぎ、銀兄い？どうしたの……っ!？」

まさかの銀時の非情な言葉に心理は彼の表情を見て固まった。

無表情。

何の感情も見せない銀時に恐怖した。

芳川も黙ったまま、と言うか喋る事すら許されない程の銀時の威圧にその場から動く事は出来ない。

「これからは木原の代わりになでもなろうってか？そんな情けいらねーんだよ。俺達はテメエなんぞ居なくても生きていけんだよ。だから……とつとつ、消え失せろ」

「銀時っ!!」

もう目線を合わせず下を向いた銀時が更に畳みをかける言葉に桂が掴みかかろうとするが、高杉が何かを悟ったように止めた。

「ククツ……あの野郎。とんでもねえ性格してんな」

ボソツと呟いて苦笑を零した。

「本当にぐめんなさい……でも、彼が遺した番外个体だけは「なーんてな」……え？」

グツと齒を食いしばりながら悲しみを耐えながら話す芳川を遮ったのは。

イタズラが成功したような、ニンマリと笑みを浮かべた銀時だった。

た。

高杉以外、キョトンとした表情で彼を見遣る。

「悪いな、芳川。俺あアンタが実験に関わっていたり、妹達をどうしたいかなんてのは、産まれた時”から知ってたんだよ”」

「実験なんかハナから知ってる。転生者だからな…だから俺がなる前の一方通行(こいつ)が10031人の御坂のクローンを殺したのもな」

「上条つったか？あのウニ頭に負けて凍結する事も」

絶対能力実験については全て知っている。そう放っていた彼に今度は全員が驚愕した。

「なんで俺が一方通行になったのかは知らねえが…もしかしたら殺す前から、止めて貰いたかったのかもしれないな」

銀時は自身が思っている事を告げ、芳川を見た。

「芳川、オマエが居てくれて良かったよ俺あ。それと」

「おかえり、芳川」

優しい表情で迎えてくれた銀時に嬉し涙が止まらずに

「ただいま。銀時、心理」

二人を抱きしめた。

「全く…止めてなかったら殴っていたところだ」

はあ…と呆れた桂の声が聞こえた。高杉はククツと笑い、インデックスは安心した笑みを浮かべた。

「あっ…こらっ…待つツス!!」

更に部屋の外から声が聞こえる。

開いた扉からヒョコつと見える小さな少女。

「もー!!いつになつたら入れるの!?!とか、これって一生入れないの!?!ってハラハラしていたよ!!ってミサカはミサカは憤慨してみる!!」

ピョンと一本、頭から立っている茶髪のやたら語尾が長い少女が騒ぎながら入ってきた。

それと

「ギャハハっ！第一位って随分な性格してんじゃん。ミサカ、いろんなところ、おっ勃ちそうだよ★」

スラツとしたモデル体型に御坂美琴よりも大人びた風貌を持った少女が、また子と一緒に入ってくる。

銀時は目をまん丸にしたが、小さい方を見て

「確かちんまいのがラストオーダー、か？」

記憶を思い浮かばせながら言った。

「ちんまい言うな!! ってミサカの事も知ってるの!?! ってミサカはミサカはさっきの話は本当だったんだーって驚いてみたり」

水玉のワンピースを着てクルリと回っている打ち止めは喜んでいた。

「か、かわいい…」

心理はキャツキャツと騒ぐ打ち止めに心打たれていた。

徐々に近づき、後ろから抱きしめた。

インデックスは心理が打ち止めを抱きしめているのをムツとしながら

「こころー!! 私も混ぜるんだよ!!」

心理の後ろに乗った。

(キヤー!! 二人とも可愛すぎる!!)

「オーイ、途中から声出てんぞー。ここちやーん」

声がダダ漏れなってるのも気にせず二人と戯れていた。

「ったく、んででけーのが」

「初めまして第一位★ミサカが番外个体だよ」

銀時は番外个体と名乗った少女を見て、少し悲し表情をした。

「オマエが木原が遺したモンか…」

そう呟く銀時に番外个体はクスリと笑う。

「ミサカ、貴方を殺さない方にプログラムされてるから襲ったりはしないよ。よろしくね」

彼女の言葉にゆつくりと頷き、頭を撫でた。

な、なにすんのさー!! と少し顔を紅くして騒ぐ番外个体を宥めていたら、また子と目が合った。

「また子ちゃん。こんな世界だけど、馴染めそうか？」

「そうっスね…まあ、銀時がいるから大丈夫ッスよ」

彼女はそう言つて微笑むと、同じように笑みを零した。
後から信女と風斬が加わり、賑やかになる。

「……銀時」

高杉が低い声を出すと銀時とともに周りが反応する

「言うつもりはなかったが……亡霊と殺りあつたみてえだな」

「テメエが寝てる間に全部聞いた」

その言葉に空気が一気に冷めた気がした。銀時は無表情で話す。

「ありやあ……松陽なのかもしれねーが、中身は化け物だ」

「松陽は自分(テメー)自身の何かと戦つて負けちまつたんだ。その姿をオメエら二人は目に焼き付けたんだろうが」

「……ああ」

「目の前で殺されたんだからな」

銀時はそれを聞いた後

「その何かが目覚めて松陽を復活させた結果、とんでもねえ化け物になつちまつたよ」

哀しそうな表情で答えた。

桂は拳に力を入れ、高杉は目を閉じて松陽が最後に残した言葉を思い出した。

「ククツ。まさか先生が言った、銀時に会いに行くがこんな形になるとはな……銀時、お前は どうするつもりだ？」

銀時は近くで心配そうに見てくる心理の頭を優しく撫でる。

「決まつてんだろ」

「先生の姿でこの世界を壊そうつてんなら……迷う必要はねえ。ブツタ斬るまでだ。それが吉田松陽の弟子である俺の役目だ」

揺るぎない決意に、全ての感情を含めたような銀時の瞳に二人は表情を柔らかくした。

「やれやれ、ならばそれは俺達にも言える事であろう。お前一人に背負わせる事など出来ん」

「弟子は俺達三人だろ。松下村塾の悪ガキ三人の俺達で先生を解放させてやろうじゃねえか」

桂と高杉は銀時に向かってそう言った。

きよとん、とした表情になったがフツと笑った。

「悪ガキ三人ね。懐かしいなあ、オイ」

暫く賑やかな時間を過ごしているうちに

日が暮れ、残ったのは銀時、心理、芳川、打ち止め、番外個体の五人だけになった。

桂は戻らなければならぬ場所があると

高杉はまだいる!!と暴れるインデックスの首根つこを掴んで銀時達の家へと

信女はアンチスキル。また子は信女に着いていき、風斬も在るべき場所へと帰っていった。

「銀時」

芳川が声をかける。

「実験は貴方の言う、凍結ではないけど、貴方が実験をやらなければ開始する事はないわ」

その言葉にそうかと頷いた。

「妹達は世界各国にバラバラに離れる事になる。学園都市には…この二人を含めてざっと二十人くらいね」

銀時は妹達が学園都市から離れていく事は知っている。

黙って聞いていると、次は打ち止めと番外個体の話になった。

「この二人と私を貴方の所へ置いてくれないかしら?」

「……はああああ!?」

芳川を含めた三人を自分の家に住ませくれないかと頼まれ、銀時と心理は叫んだ。

「知り合いに迷惑をかけるのも、どうかと思うし、貴方達なら事情は把握してるから安心出来るでしょ?」

「おねがーい!!」ってミサカはミサカは心理おねーちゃんと銀ちゃんにお願いしてみる!!」

芳川の言葉に二人は皺を寄せるが、打ち止めの上目遣いに心理が「あー!! やっぱ可愛すぎる!! ねえ、別にいいんじゃない? 高杉さんとインデックスもいるんだし」

やられていた為、芳川達の味方をした。

打ち止めに対して、心理がこうなってしまったのでは仕方ないと諦めて

「…仕方ねえな」

首を縦に頷いた。

やったー!!

良かったね

などと二人が喜んでるのを、芳川は微笑む。

「随分と妹さんには甘いんだねー? 第一位は」

「第一位つてのやめてくんない? 銀時でも銀さんでも、打ち止めみてーに銀ちゃんでもいいからそう呼んでくんねーかな。…:心理には辛い思いをさせまくってるしな。これくらい、どーって事ねーよ」番外个体がニヤニヤと絡んでくるのを顰めながらそう答えた。

「んー…んじやあ、あ・な・たつて呼ばせてもらおっかな」

すると、ビシツと額にデコピンを食らわせた。

「ガキが何言つてんだ。木原の奴…:どんな知識をこいつに埋め込んだんだよ…」

額を撫りながら番外个体は銀時が笑っているのをジツと見ていた。

(木原さん、貴方が護りたかったものを今度はミサカが必ず護るから…:見ててね?)

彼女は彼が遺したものを護る、と心の中で誓った、

「あ、後…:銀時と心理には学校に行ってもらおうわ」

突然の芳川の発言に心理は打ち止めと戯れるのをやめ、銀時は怪訝そうに彼女を見た。

「銀時には知り合いが教師している高校。心理には超電磁砲がいる常盤台中学に通ってもらおうわ」

「話を通っているわ。第一位と第一位の妹でレベル4つて言ったら、アッサリと受け入れてくれたわ」

淡々と話す芳川にポカーン、としていたが直ぐに覚醒した。

「待て待て待て」

「いやいや。私、暗部なんですけど」

いきなり過ぎて状況を掴め切れずに動揺していると

「銀時と心理にはもつと友人を作つて一般的な日常を味わつて欲しいのよ。勉強は貴方達には余り必要じゃないかもしれない。けど、人との触れ合いは必要でしょ」

彼女の極普通の日常を味わつて欲しいと言う願いが込められていた。

「ミサカはね？心理おねーちゃんと銀ちゃんがずっと幸せでいてくれたらなーってミサカはミサカは二人の幸せを本気で願つてみたり！」

「それをミサカ達が側で見れるだけで幸せだしね」

この二人にまで言われてしまつては断るなんて選択肢はない。

「はあ…：わかった、わかりましたよ」

「美琴もいるから…：それもいいかもね」

結局、二人は折れた。

そして、現在。

心理が常盤台の魔王として君臨したと同時に、とある高校の1—Aの教室でも担任の言葉で賑やかになっていた。

「はーい。今日からこの教室にビツクな転入生が皆さんと共に過ごしてもらおうですよー!!」

ピンク色の髪をした子供のような身長と体型をした教師が教壇の前に立っていた。

誰ー？男かなー？女かなー？と騒ぐ生徒に担任である月詠子萌はにこやかにしている。

「残念！野郎ども。喜べ子猫ちゃん達！転入生は男ですよー。それになんとか!!学園都市第一位なのですよー!!!」

月詠先生の発言に

第一位がこの学校につ!?嘘だろっ!?と信じられない者が大半だが、

特に上条は心中、穏やかではない。

(え?これって…話したことないけど、絶対あの人だよな!?)

上条は現実でも叫びそうになったが、心の中で留めた。

第一位なんて言われれば、あの白髪の少年しか浮かばない。

(てかタメだったんですかー!?あの人…)

背も高く、妙に大人びた少年が同級生になる事にビックリだった。

そうこうしてる内に入ってと月詠先生の合図と共にガラツと開かれると

そこには上条の知っている目とは違い、死んだ魚の目をした白髪の少年が入ってくる。

それでも、目以外は見覚えがある。

「どうも。学園都市第一位の坂田銀時です。あく能力とか無能力とか実際、興味ないんで。あるのは糖分摂取とブラックコーヒーくらいなものなんでよろしくお願いします」

そしてやる気のない、覇気のない声で挨拶をした銀時がいた。

(何か、すごい変わりようなんですけどおおお!!)

あの戦闘の時のイメージと今のイメージが違いすぎて混乱した上条だった。

「おお。ウニ条君」

「いや、上条です」

目線が合い、名前を間違える銀時に速攻で訂正した。

約束は破る為にある

下校時に美琴と黒子は一緒に歩いていた。

「そう…なんですよ…そんなことが…」

黒子はあの事件でアンチスキルと共に対応に追われていたが、美琴に詳しい内容を聞かされて言葉を詰まらせた。

目の前で親を殺され、死んでいたと思われた恩師が化け物並の存在になって現れたという情報になんと言ったらいいか、分からなかったのだ。

「それにしても…心理さんが入ってくるなんてビックリだわ」

心配していたのが嘘のように平然と美琴の前に先輩として現れたのだ。

「それにあんな紹介…恐怖しかありませんの」

黒子は思いだして少し顔色が悪くなった。

美琴は苦笑いをしている。美琴としては、あの第五位をもろともせず正面からメンチを切る心理を流石としか、言わざるを得ない。

「おー。御坂にチビ助じゃねえか」

そんな風に思いを馳せていると前から聞き覚えのある声。

それはもう一人心配していた男で、心理の兄である

「あ、アンタ…！ってその格好っ!？」

坂田銀時がいた。

それにも驚くが、銀時が制服を着ている事が一番の驚きだった。

黒子はチビ助言うな！と憤慨しているが。

「あ？ああ…成り行きで上条んとこの高校に入ったんだよ。オマエらんとここに、ここちゃん来てたろ？」

こちらはダルそうにしてさらには目が死んだ魚のようになってい

る。

「アンタ達…大丈夫なの？」

銀時は一瞬、空を見上げてから美琴達を見た。

「大丈夫って訳ではねえが…いつまでも引きづっていても仕方ねえだろ。それに…母親みてえな奴がいるし、奴の分まで背負って生きてい

くしかねえんだよ、俺達は」

どこまでも見据えている銀時の目に美琴達は吸い込まれそうになっているが、彼はニヤニヤと笑って美琴をからかう。

「んだあ？そんなに心配してくれてんのかあ？御坂ちゃんは」

ポンポン、と彼女の頭に手を乗せてにやけていると顔がこれ以上ないほど顔が真っ赤になった。

「そ、そんなんじゃないわよ!!／＼」

手を払い退けて反論するが、相変わらずケラケラしている銀時に腹が立った。

横では、黒子は何故か悔しそうにしていた。

「相手が第一位様ではなければ…」

相手は銀時なのだから敵う筈がないとがつくりと肩を落とした。

「あれ？美琴に黒子？だっけ？あと銀兄、何してんの？」

「ここちゃん。学校どうだっ…た」

近くから心理の声が聞こえて振り向くとビシッと凍ったように固まった。

美琴と黒子も同じ反応だった。

「…どうしたの？」

心理は不思議そうにしていたが、周りを見ると彼女を遠ざけるように歩いている人がたくさんいた。

何故なら

心理の後ろにはゾロゾロと常盤台の生徒が集結していたからだ。

「いや、なんでだあああ!!!」

銀時がいち早く覚醒してジャウトした。

「心理!!初日で何しやがればこうなるんだよ!!!お嬢様支配して何する気っ!!」

二十人はいるだろうお嬢様の中心に堂々と彼女が立っているのだから叫ばずにはいけない。

心理は後ろを見てああ、と納得して

「ちよーつと脅したら…っついて来ちゃった」

ニコツと笑う心理に後ろでは思い出さくないのか、青白い顔をし

た生徒がほとんどだ。

(オイイイイイイイ!!女王どころか、魔王誕生しちゃったんですけどオオオオオオオオオオオ!!)

段々と妹が自分からかけ離れていく存在になりつつある事に頭を抱えた。

「やっぱ目立つか。もういいよ解散で」

そう言うで一礼して別々に離れていった。

「あーっ!!ぎんときーっ!ここりーっ!!」

更にそこに新たな人物が二人。

右手をこちらに振りまいてニコニコしているインデックスの左手には

「ブフオツ!!」

不機嫌そうに向かっている高杉の右手が繋がれていた。

思わず、心理と銀時は同時に吹き出した。

派手な着物を着た男と修道服がきた女子供が手を繋いで歩いてるなど、シニールな光景だからだ。

「しんすけがねー、お前はウロチヨロしていなくなると悪いから、こうしてる」って言ったんだよ!!私だってそこまで子供じゃないかもっ!!」

プンプンと怒っているインデックスに対して

「事実だろ」

と鼻で笑った。

「で、テメーらはいつまで笑ってんだ…」

未だに笑いが収まらない兄妹に益々、不機嫌になった。

「オマエがそんなに子供好きになってるとは思ってたからだよお」

「危うく、ロリコン疑惑でそこにいるジャツジメントに捕まえて貰おうとしてたわ」

ニヤニヤ、クスクスといった二人の表情に睨みつけるが、効果はいまひとつのようだ。

チツと舌打ちしながら溜息を吐くも、まだ手は繋いだままだ。

変わったなあ。高杉

そんな事を思いながら、ニヤニヤから穏やかな表情に変えた銀時。美琴も黒子もあははと笑って見ていた。

「んで、何でオマエがインデックスと一緒に来てる訳？」

「コイツ一人にしちゃあ、どこぞの連中が狙うかわかんねえからな」

高杉はインデックスをハアッと溜息をつきながら見て、銀時の問いにそう答えた。

「そう言えば、あの『魔術師』二人…あれ以来見てないわね」

心理が思い出したかのように呟けば、美琴も同様に頷く。

「オイオイ。銀さん抜きで何、進めちゃってるんですかあ？つーかオマエら会ってたのかよ」

黒子は何の話をしているか分からない為に首を傾げているが、銀時は眉間に皺を寄せている。

高杉が再びインデックスを見遣るとピクリと反応する。

「聞いてなかったなあ。お前が何で追われてんのか」

「…私の頭の中には『十万三千冊の魔道書』があるんだよ。そして見たもの、聞いたもの全てを忘れない『完全記憶能力』を持っている。あの人達はそれを狙っているのかも」

観念したかのように自分の推測で話し出すインデックス。

完全記憶能力は分かるが、十万三千冊の魔道書が頭の中に詰まっているなど、オカルトチックなものが出てきた。

「魔道書…ねえ」

「そっぴゃあ、そんな事言ってたっけなあ？」

高杉は興味深く呟けば、スタスタとインデックスの方に近づくと銀時。

「ぎんときっ？」

不思議そうにしている彼女の頭に手を当てると銀時は目を瞑り、演算を開始した。

その瞬間だった。

ピキッと頭の中で何かが弾け

「ゴフツ!？」

大量の血が銀時の口から流れてそのまま倒れた。
周りは何が起きたか分からず、混乱している。

「おいっ!!銀時っ!!」

「インデックス!?銀兄に何をっ!?!」

高杉はすぐに銀時に近寄り、上体を起こしてあげた。心理はインデックスを睨みつける。

インデックスも美琴も黒子もこの状況に追いつけないでいる。

ただ一人、銀時だけは納得したように血を拭い、笑った。

「なるほどねエ…科学の力で魔術を解析しようとするところなるって訳かい」

「オマエ、魔術使ったことあるか?」

銀時はインデックスの様子を伺う。

「う、ううん…魔術は私は使えないんだよ…でも、何で」

訳が分からない、と言った顔で答えると

「その十万三千冊の魔道書に俺が魔術とは違う、異能の力を使っちゃまったからだろ。これではつきりと分かった…科学(俺達)と魔術(オマエ達)が共存する事はありえねえだろうよ」

科学と魔術さ相対すべき関係であり、交わる事はない。

銀時は憶測でそのように判断した。

それといきなり美琴に振った。

「御坂。オマエの能力は上条に通じなかったんだよな?アイツは何だ?」

「え?アイツは無能理者らしいけど、右手には『能力を打ち消す力』を持ってているわ」

いきなりの事にビクつとしたが、上条の能力を思い出して嫌そうに答えた。

もし、その力が魔術も打ち消す事が出来るのならインデックスを救えるのは銀時ではなく上条である。

「ハッ。どうやら…俺じゃあ、テメエを救えねえな。インデックス」
「…え?」

この男は今、何と言ったのだらうか。

「高杉、心理…帰るぞ。俺達とオマエはここで『お別れ』だ」
「……」

「銀兄さん…本気で言ってるの?」

高杉は黙ったまま銀時を見ている。心理は苦い表情で尋ねる。

銀時はそれを肯定すると

「い…いやだよ…ぎんとき。一緒に居てくれるって…」

苦し紛れの声で彼が離れていくのを阻止しようと手を伸ばす。

「悪いいな。全部忘れてくれや」

インデックスを見向きもせずに歩きだした。

「いやだよ!! 忘れたくないんだよ!!…ぎんとき!!」

ポロポロと涙を流して銀時に近づく。そして掴める位置までになった瞬間

「さよならだ。インデックス」

最後まで此方を見る事なく、非常な言葉を放った。

インデックスは掴もうとした手を止め、歩を進めた銀時の背中を茫然として立ち尽くした。

高杉はインデックスを見たが、無言で通りすぎる。

心理は心配そうにしているが、銀時の呼ぶ声に従って渋々、彼女から離れていく。

「どうして…?…なんで…:…待ってよ、しんすけ…:…こり…:…ぎんときい…」

もう、さつきまで手を繋いでいた高杉の優しさも

心理との楽しかった日々も

銀時の自分の全てを包み込むような温もりも感じられなくなってしまう。

ポタリ、と何度も涙が地面に落ちる音は彼女の声をかき消した。

そんな姿に美琴と黒子は何も声をかける事が出来ずに悔しそうに表情を歪めた。

能力者と魔術師の協力

ガチャリと玄関からドアの開く音が聞こえてきて、打ち止めはリビングから玄関へと飛び出していく。それを残りの二人も苦笑しながら付いていく。

「おつかえりー!!」ってミサカはミサカは誰かな?」って確認せずに飛び込んでみるー!!!」

それをしっかりと受け止めたのは

「おー。元気いいなあ、オメーはよお」

やる気のない声を出した銀時だった。

「あー!!銀ちゃんだったんだね!!」ってミサカはミサカは…ってあれ? インデックスは?」

相手が解ると嬉しそうにしているが、インデックスが居ない事に気付いた。

「……………」

銀時の後ろにいる二人は無言のまま、何も答えようとしなない。

打ち止めは不思議そうにしていたが、番外個体と芳川の二人は銀時達の様子に嫌な予感を感じていた。

銀時は打ち止めを降ろして一息ついてから変わらない声量で、こう答えた。

「アイツとなら、サヨナラしてきたぜ」

「……………え?」

打ち止めは銀時の放った言葉が信じられなかった。

「アイツの抱えるもんがとんでもなくヤベエもんだってのが、この身を持ってわかつちまったからよ。それを救ってやれるのが俺じゃねえって事もな」

リビングにあったソファアに寝転んでつけてあったテレビに目を向けていた。

「貴方はそれで納得してるの?」

芳川がテレビから目を離さない銀時をじつと見ている。

「納得も何も…俺あ厄介事はごめんなんだよ」

そんな銀時に対して打ち止めが叫んだ。

「あの子がどれだけ貴方に信頼を寄せてるか分かってるの!?! ってミサカはミサカは貴方に怒ってみる!!」

打ち止めはインデックスと過ごして分かった事がある。

まず、銀時の話になれば嬉しそうに顔を綻ばせながら話しているのを知っている。

入院している時もどれだけ心配して、彼のために涙を流していた事も知っている。

そしてインデックスが彼の事を大好きだと言う事も打ち止めは知っている。

「そんなもん……知ったこっちゃねーよ。こっちは」

未だにテレビを観ながら冷めた口調で話す銀時に打ち止めは両手をギュツと握り締めて

「銀ちゃんのバカああああ!!!」

語尾も忘れて家から飛び出して行ってしまった。

「あつ!!ちよつと!!」

心理が銀時達を見てから大分遅れて打ち止めを追った。今は銀時よりも打ち止めを最優先に取ったのだろう。

「私も打ち止めの方へ行くわ。銀時、貴方が本当にこのままでいいと思うなら……それはそれで私は何も言わないわ。それが貴方が決めた事だもの」

芳川は静かにそう言葉を残して心理と打ち止めの後を追った。

「もしテメエがこのままでいいって思ってたんなら、その腐りきった魂ごとテメエをぶった斬るぜ。……テメエがまだ腐ってねえなら思うがままに動けばいい。俺達はそれをサポートしてやる」

芳川の言葉を繋げたように話すと、残るであろう高杉までもが外に出て行ってしまった。

残るは銀時と番外個体のみ。

「テメエは行かねえのか。ちんまくだってオマエらの上司だろ」

漸くテレビから目を離し、彼女の方へ向いた。

「ミサカが動く時は、貴方が動く時だよ。銀時」

番外個体は銀時がいる場所に残ると言う。

「はあ…何だっただよ。これで良かったんだ…って思ってたつつのによ」

困ったような表情でガリガリと頭を搔き筆る。魔術なんて力にまだ適応していないと言うのに、どうしろと言うのだと。

「どれが一番、正しいかなんて誰もわかんないよ。それを決めるのは自分だしね」

番外個体は銀時の近くに寄って微笑みかける。

「チツ。分かっただよ…こんなじゃダメだっけ事ぐれエよ」
重い腰を上げて立ち上がるのを見て苦笑する。

苦笑している番外個体を怪訝そうに見ながら玄関の方へ歩いていく。

「おつ。ならミサカ一人だけなんてつまんないから着いていくよ」

ニヤリと笑って着いて来る気満々な彼女に溜息をついて

「ダメだっけ言っただよ無駄なんだろうな」

呆れた表情でそう答えた。

「わかってんじゃない！きっすが銀時だね」

ケラケラ笑っている彼女にまたもや溜息が出てきた銀時だった。

取り残された美琴と黒子は現在進行系で困り果てていた。

美琴の隣には正気がなく、ただ呆然として一緒に歩いているインデックス。

(あいつ…本当にこの子を突き離す気なの…：？)

美琴は銀時の非常に冷めたように吐き捨てた言葉が引つかかっている。

「あれ？ビリビリ？と…その子はたしか…」

聞きなれた声にパツと振り向いた。

その黒髪のツンツン頭は共に闘った仲である為、憶えている。

「上条当麻…」

銀時が言っていた、インデックスを救えるかもしれない人物が買

物をしたのか、両手に袋をぶら下げていた。

「あれ？その子、銀さんのところじゃ…？」

上条は銀時が学校に入ってきてからはそう呼ぶようにしていた。

それにインデックスの表情をきちんと見ていなかった為に、目の前で「銀さん」と刺激を与えるような事を軽々と口にしてしまった。

「……ぎんとき？どこにいるのっ!？」

ピクリと反応したインデックスは錯乱でもしたかのように叫んで走り出した。そして誰も通らないような路地裏に入っていく。

「あっ!!バカっ!!」

「お姉様っ!？」

「おいっ!?!どうしたんだ!?!」

美琴は上条をひと睨みしてからインデックスを追いかけて、後から二人も追う。

美琴は路地裏に入って立ち止まる。追いついた二人もその視線に合わせてそこには

「離してっ!?!ぎんときに会いにつ!!」

「終始見ていたが合わせる事は出来ん。銀時に見捨てられたのなら尚更だ。それにインデックス殿には俺達と一緒に来てもらわなければならぬのだ」

インデックスを担いでいる長髪の侍。

これには美琴も上条も見覚えがある。

桂小太郎。あの魔術師二人と一緒にいたかと思えば、高杉と共に紅桜を滅ぼした人物だ。

「アンタ…アイツの仲間じゃないの?」

美琴は桂がインデックスを担いで何処か行こうとしているのに驚いている。

「……神裂殿とステイル殿にも世話になつてるのでな。事情は知らぬが、銀時に危害を加えた事も含めて放つてはおけんだろう」

銀時に危害を加えたと言う言葉にインデックスはギョツと歯を食いしばる。

「でも…私はぎんときに会いたいんだよ…」

やはりこのまま銀時との別れはインデックスにとっては辛すぎる現実だ。

「まずは自分を知る事だな」

だが、桂はそれに対して首を横に振った。インデックスは涙を堪えきれずに流した。

そこへ

「桂、ありがとう。僕達だけでは太刀打ち出来ないから助かったよ」

背の高い赤い神父の服を着た男が現れ、桂に話しかけた。

「ステイル殿。神裂殿は？」

魔術師の一人、ステイルⅡマグヌスはフツと笑いかける。

「準備は完了だ。後は神裂が接触すると思うよ」

「…そうか」

ステイルの言う“準備”に桂は静かにそう答えた。

「なら、その準備とやらの前に俺がここに来る事も想定内か？」

「！」

ザツと草履の音を立てながら現れる男が嫌味つたらしい表情で問う。

「しんすけっ!!」

「…高杉」

潤んだ瞳で嬉しそうにしているインデックスに対して静かに呟く桂。

「そのこの神父。テメエらが狙っているのは頭ん中にある魔道書か？それとも、こいつの魔術の力か？」

高杉がステイルに問う。桂と美琴や上条、黒子も静かに見守る。

問われた彼は目を見開いて驚いていたが、冷静に答える。

「君が何処まで知ってるのかは知らないけど…インデックスに魔術は使えないと聞いているよ」

聞いている、とステイルの言葉に高杉は確信した。

「つー事は上司からでも上手く唆されたか？ちびシスターが魔術かなんかの力で銀時を攻撃したのは事実だぜ」

「ステイル殿…。悪いが、俺も見た」

「何っ!？」

ステイルは高杉と桂が言った事を理解するのに少し時間がかかった。

インデックスに魔術を使う力はない、と上からはそう言われていたからだ。

その反応みて、ステイルともう一人、神裂という女はこの事は知らないだろうと高杉はそう思った。

「テメエらの上の奴らは何か隠したかったものでもあんじゃねーのか？例えば、こいつの中にとんでもねえ獣が住んでいる。とかな」

「テメエらにも言えねえ何かがあるとしたか言いようがねエよ」

部下でも隠したい何かがあるインデックスの中に潜んでいる。

魔術、十万三千冊の魔道書以外の別の何かがある。

銀時はそれを確かめようとしたのではないかと、彼は踏んでいる。

「おい、ビリビリ女。銀時はちびシスターに何をした？」

高杉はそもそも銀時が持っている力もまともに理解していない。知ってるかもしれない美琴は高杉が呼んだ名に不機嫌になりながら少し考えた。

今まで聞いていた美琴は高杉が呼んだ名に不機嫌になりながら少し考えた。

「その呼び方、やめてくれませんか?…アイツは多分、その子の中にある力を解析して、その力をベクトル操作。力の向きを変えて抑え込もうとしてたんじやないかと私は思っているわ。でも…解析すら許されずに拒絶された。だからあんな風に言ったんじやない?」

科学と魔術は交わり合うことはない。

その言葉は思い出して、自分なりに銀時がやった行動を推測した。「なるほどねエ…だが安心しろよ、ちび…インデックス。銀時はいくら頭の回転が早くなるうが、今も昔も何にも変わりやしねえ…バカな侍だ。銀時は必ずお前を救う」

桂から降ろしてもらっていたインデックスの頭を撫でてそう言った。

「うん、うん…っ!!」

インデックスはその言葉を聞いて嬉しそうに何度も頷いた。

それを優しげに見つめた後、ステイルの方へと向き直す。

「さて……ここで俺達と殺りあっても何の意味もなさねエんだが……ツラとテメエはどうすんだ？」

「出来ればお前達とはぶつかりたくはないが……ステイル殿にまかせよう」

高杉がそう言うのと桂はステイルの答えを待つ事にした。

「……もしあの男がインデックスを救える希望だと言うのなら、僕はそれに縋ろう」

ステイルからしては他人任せになってしまるのが許さなかったのだが、たった一つの希望がインデックスが今、心の拠り所になっている坂田銀時と言う科学で最強の能力者である彼しかいないんだとすれば、それに賭けてみようと思った。

「じゃあ決まりだな。あの女の居場所を教えろ」

ステイルの答えを聞き、高杉はそう言った。

銀時と番外個体は少し静かすぎる街に違和感を感じていた。

「なあ……なんか何時もと違うんだよなあ……」

「ミサカはあんまわかんないけど、人がいないのもおかしいよね？」

番外個体はあんまり外には出たりはしないが、街の様子に疑問を抱いていた。

「それは、ステイルが人払い《ルーン》を貼っているからですよ」

声が聞こえたと思えば、目の前には奇抜な格好した女が立っていた。

「なんだあのネーチャン。エロいんだけど誘ってんのか？」

鼻に手を当てても隠しきれないほど鼻血が出ている銀時を軽蔑したような目で見つめる番外個体。

「なっ！私だって好きでこんな格好してる理由ではありません!!」

顔を真っ赤にして女は銀時に向かって叫んだ。

「で？俺達になんか用でもあんのか？こちとら、人探して暇じゃねー

んだ」

「真面目な顔をして、鼻血出っっぱなしだから台無しだよ。銀時」
ちよつと真剣な表情をしても欲を抑えきれない銀時に番外個体は
ツツコンだ。

まあ年的に思春期まっさかりだから仕方ないだろうとは思うが彼
女は若干、引いていた。

女はゴホン、と一つ咳払いをして顔を引き締める。

「それはインデックスの事ですか？」

インデックスの名前を出した事に二人はピクリと反応した。

「オマエ：インデックスに用があんのか？」

鼻血が治った銀時は鋭い眼つきで女を見るが

「オマエではなく、私は神裂火織と申します。インデックスを突き離
した貴方には関係がないでしょう？」

負けず劣らず、とした眼光で神裂は睨み返して来た。

「はあ：見てたっつー事ね。いい大人がストーカーですか」

やれやれとわざと呆れたようにため息をついた。

「私はまだ18歳だっ！ど素人がああああっ!!」

大人と言われて我慢ならなかったのか、先程とはガラリと豹変した
ように叫びだした。

「オイオイオイオイ：こんなナイスバディなネーチャンが、オレと大
して変わらねエ年だど？最近の若い女は成長が速いこつてえ。ああ
：オレの天使である風斬もそんな感じだったな」

驚きながらも風斬と比べながら神裂をまじまじと見つめる。

「ミサカも良い線、いつてると思うけど？」

「テメエは0歳児だろうが：。見た目はオレと変わらなくても、年齢
でアウトだ」

番外個体は気に食わなかったのか対抗したが、銀時は冷静にツツコ
ミを入れた。

神裂は少しドキツとしていた。先程まで悪党面+死んだような魚
の目をしていた男がキリツとして顔を引き締めてこちらを見つめて
いたのだから。

悪党面とか言われようが、銀時はイケメンの部類に入る。彼女は初めての事でどうしていいかわからなかった。

「あ、貴方こそ大人ではないのですか!?悪党面でそんな身長で、私より若い訳がありませんっ!」

せめての反抗なのだが、これしか出て来なかった。

第一、背だけ銀時より高いスタイルがいるのだが…混乱して忘れてしまったようだ。

「どいつこいつも悪党面って喧しいわあああああっ!!クソツタレがつ!これでも16歳だこのヤロオオオオオオオオオオオ!!」

ずっと悪党面と言われて気にしてわざとやる気のない顔をしていると言うのに。

銀時はとうとう我慢の限界がきたようだった。

神裂は銀時が年下だと言う事に驚きを隠せないでいたが、ラチがあかないために本題に入る前に一息ついた。

「それよりも…貴方は一体、インデックスに何をしたんですか?…インデックスはどうやって、貴方に攻撃したのですか?」

彼女の問いに銀時は

「インデックスがそっち側ならテメエらの方がわかんだろうよ」

しかめっ面でそう返した。

神裂は銀時が言う、そっち側とはきつと魔術の事を言っているのだろう。

でも、神裂が情報では魔術が使えないと聞いている。

だが、身をもって知った銀時の言葉にどうも嘘をついているとは思えない。

「…なら、私達は嘘の情報を伝えられた可能性があるのですね?」

「だろうな。だとすると…インデックスに関する情報は全部嘘だと思っただろうがいんじゃないの?」

「完全記憶能力によって頭の中がパンクして死ぬ、と言う事も?」

銀時は目の玉を大きくして一瞬、番外个体を見た。彼女も同じ反応をしている。

「状況をあんまり把握してないんだけど…それが本当なら、ミサカ達

だって生きてないと思うよ」

「俺達あ、能力を發揮するには頭ん中が必要だ。ましてや、レベル4、レベル5なんかは膨大な情報量が必要不可欠だぜ？特に俺や他のレベル5はインデックスの魔導書や完全記憶能力並みのな。パンク？笑わせんな：脳つてのは人の寿命より長いんだよ」

死ぬなんて事あるんなら、学園都市なんて存在しねえようなもんだ。

これで決まったようなものだった。

神裂は後悔した。今までインデックスにしてきた事を。

下手したら目の前の彼らと闘ってでも保護しようとしていただろう。

今の彼女にはそんな気力はない。

「：インデックスにはここ一年間の記憶がないんです。：私達が消してしまったようなものです。あの子を悲しませないようにと：でも、それすらも間違っていたのですね」

一年間の記憶がない。それは銀時達も初めて聞いた。

「まだ、やり直せんだろうが。さっさと全部終わらせて、テメエらとインデックスの思い出も作り直せばいい。だから：その為にも、俺達と協力しろ」

銀時は神裂の元へ歩きだして、手を前に出した。

「突き離れたのお互い様だ。だけど、アイツはもう：俺の家族だ。もう一度やり直す為にアイツを護らなきゃならねえ。力を貸してくれねえか？」

彼の力強い言葉と意志の強さに惹かれてその手を取った。

「分かりました：私やステイルも、あの子を護りたい気持ちは同じです」

彼女もまた力強く返した。銀時はその答えにニンマリと笑った。

それを見た番外個体は隣に並ぶ。

「よし。行くか」

こうして能力者と魔術師の共同戦線が始まる。

「ねえ：銀時」

三人が歩きだそうとした時に、番外個体が銀時を呼び止める。

「ミサカも桔梗にM N W（ミサカネットワーク）に妹達と共有して貰えたんだけど…大変な事になってる見たいだよ」

銀時は、は？と言う顔で番外個体を見た。彼女は冷や汗をタラリと流して苦い表情をした。

「打ち止めがまだ見つからない代わりに…靴が見つかったって」

銀時は驚愕して携帯を取り出した。

そこには心理と芳川からの着信が入っていた。

そして、また心理からの連絡が入った。

「おいっ!!心理っ!!何があった!?!」

出るなり、銀時は叫んだ。

『銀兄さんっ!!!打ち止めがっ…攫われたわっ!!!今、特定して貰ったから、こっちは任せてっ!!!』

かなり急いでいるのか、すぐに電話は切れてしまった。

「おいっ待てっ!!心理イ!!」

残るのはツー、ツーと通話が切れた音のみ。

「クソツタレが…っ!」

「場所…ミサカにも送られてきたけど…どうする?ミサカは貴方の行く方へ着いていくよ」

銀時は番外個体を見た。どんな事になろうと自分に着いていく揺るぎないものを感じる。

そして神裂を見る。

「私からでも貴方の妹は弱いようには見えませんが…貴方の判断に任せます」

彼女は心理を見た事がある為、感じた事を伝えた。

「…ここで心理に行ったら、信頼されてねーって思われるからな。俺達はインデックスを救う」

銀時は心理に打ち止めを任せてインデックスを救う事に決めた。

悪党の護るもの

銀時達が共同戦線を結んだ頃。

「……………ん？」

高杉達は桂とステイルとの話が纏まり、神裂がいる所へ向かおうとするが誰かの携帯が鳴り始めた。

「……………ああ？」

なんと、高杉の懐からだった。しかもスマートフォンである。

「高杉！貴様ついこのまにそんなものを!？」

「チツ。あの銀時兄妹が持つておけって勝手に買ってきたんだよ」

桂から驚かれ、面倒くさそうに答えて鳴り響くスマホを見ると

銀時妹、と表示されていた。

打ち止めが見つかったのか、と思つて通話の方に指で画面を触つた。

『あつ、高杉さん!!』

「……………ああ？何か焦つてるような声だが？」

いつもの心理の声に高杉は疑問を抱きつつも、耳を当てると

『打ち止めが攫われたわ!!銀兄さんにも連絡はしたわ!!』

「……………何だと？」

打ち止めが攫われたと聞いて、表情がさらに凶悪になった。

それを見たインデックスは「ひっ！し、しんすけ…??」とあまりの

怖さに涙目になって震えながらも彼の裾に手を掴む。

それを見た桂とステイルは高杉の表情が気になったが、震えながら

も高杉の側を離れないインデックスの姿に

「高杉にも相当懐いているのだな……………」

「……………」

桂は驚き、ステイルは悔しそうにしていた。

『……………インデックスもいるの?』

インデックスの声が聞こえたのか、少し悲しそうな声だった。

「ああ、ちびシスターは見つけた…変わるか？」

裾から手を離して彼女の頭を優しく撫でる。インデックスは心地良さそうにしながら心理と話したいオーラを出していた。

『……いいえ。ただ、全部終わったら…銀兄さんの金で家族全員で何処か行きましょうって伝えて』

「……そうかい、そりやあい提案だ。伝えておくれ…それと」

高杉はインデックスを見て首を横に振った。インデックスはしゅんとしたのを見て更に頭を優しく撫でた。

『?』

「あのアホ毛のガキの居場所を特定できてんなら俺に教えろ」

高杉は心理に打ち止めの居場所を教えろと言った事に心理はえっ?と電話越しに驚いていた。

『……高杉さんが強いのはわかるわ。でも、刀一本で済むような街ではないのよ?貴方にもどんな危険に及ぶかわからないし、一応私のリーダーにも協力してもらってるし』

どうやら、心配してくれてるらしい。高杉はフンと鼻で笑った。

「ガキが一丁前に大人を心配してんじやねえよ。第一、お前も似たようなもんだろ?銀時から聞いてるぜ。アイツは随分とお前を気にしてるからな…それに俺がちよつとやそつとで死ぬタマか?それに俺あ、お前らを安心して暮らせるようにする為に来てんだ…関わるのは当たり前だろうが。何回も言わせんな銀時妹。いや」

皮肉めいた言い方をしながらも最後は優しく
「心理」

と初めて心理の名前を言ったのだ。

『!!!…ふふっ。あははははっ!!!やつと名前を言ってくれた。何だか木原さんを思い出すわ…そうね。そうだったわ…貴方はその為に来てくれたんだもんね。わかった』

心理は高杉を木原数多と重ねていたのだろう。懐かしそうに、嬉しそうに了解した。

高杉は木原数多を見た事はないのでチツと舌打ちをしていたが。

『一応、貴方と合流するように仕事用のやつで伝えているから特定して向かってると思うわ』

銀時の次に強い能力者である垣根帝督がどんな奴かはまだ会った事はない。

「ああ…分かった。お前も気をつけるんだな」

『フフツ… お互いにね』

そう言つて通話は終了した。携帯を閉まつてインデックスと目線を合わせるようにしやがみ込む。

「…悪いな。あつちでも問題発生したみたいだ。俺は行かなきゃならねえ」

高杉らしくない、申し訳無さそうな表情で言うと彼女は寂しそうにしていた。

「また…私から離れていくの…?」

泣きそうなのを耐えるインデックスに高杉は

「離れねえよ。俺を含めて銀時、心理、芳川、打ち止め、番外個体…この六人はテメエの家族だ。誰一人とも離れよう何ぞ思っちゃあるめえよ。誰一人とも欠けずに、お前の元に必ず帰ってくる」

「家族一人一人の名前を言い、全員がインデックスを離れないと、インデックスも家族だと言つてくれた。」

「だから俺達を信用しろ」

「…うん!」

ニコツと漸く笑つてくれた彼女に高杉はホツとした。

(…:…本当にこの世界に来てから俺はどうしちまったんだろうな?)

自分でもこの変わりようにはビックリしている。

自分にもまた護るものか出来たからだろう。

(今度こそ…:…失っちゃいけない。何が何でも守らなくちゃならねえ)

あんな悲劇は二度とゴメンだ、と心に誓った。

「言い忘れたが、心理が全部終わったら家族全員で何処か行こうってだよ。銀時の金でな」

心理からの伝言を伝えるとインデックスはさらに笑顔になった。

そしてスクツと立ち上がって桂を見る。

「ツラあ、コイツら頼んだ」

「ツラじゃない桂だ。高杉…本当に良かったな」

了解とともにウザったい表情を向けられた高杉はそれだけで何の事を言われたのか理解していた。

「…うるせえよ」

フツと笑った。そして

「アンタが高杉晋助…だよな？」

高杉と桂以外、面識がある連中をいきなり現れた人物に驚愕した。

「心理定規から頼まれてアンタんここに来た。…つたく俺がリーダーだつつうのによ、コキ使いやがって」

第二位の垣根帝督が溜息を吐いていた。

「心理定規…？ああ、心理の能力名ってヤツか。俺が高杉晋助だ。俺も今から心理にコキ使われる所だ」

ククツと不敵に笑う高杉に垣根もつられて笑みをこぼす。

「お互いに厄介なヤツを持っていると苦労すんなあ。だが…頼られるのは悪くねえ」

全く、ヤキが回ったもんだと苦笑している。

「ククツ…違いねえ」

高杉もまたそれを同感した。

「じゃあ、行くか…テメエらインデックスを解放してくれよ？」

インデックス以外の全員が頷くと前を向いて垣根の方へ歩く。

その表情は

「ヒュー…こえーなあ。アンタ」

第一位並みの悪党顔だと垣根は高杉の表情を見てそう思った。

「ククツ…誰の家族に手え出したか身を持って知ってもらわねえと困るからなあ」

笑いつつも、殺気立つ様子に垣根すら身震いしている。

「アンタ…暗部に入る気になんない？俺の組織は大歓迎だぜ？」

「俺は好き勝手にやるのが好みでねえ…悪いが断る」

「だと思っただよ」

無駄な勧誘はやっぱり無駄だったと垣根はポリポリと頭を搔いた。

「まあとにかくゴミは綺麗に掃除しないとな」

垣根の言葉に高杉は頷いた。

合流完了、と言う知らせが心理の携帯に入ってきた。

「ふう……」

一息ついて彼女はある建物を見つめる。

総合研究センターと大きな看板が目の前にあり、そこに坂田心理は立っていた。

そこに打ち止めがいるとは思ってない。

何故なら、

『ある場所で妹達を使つてまた悪巧みをしようとしている奴らがいるの：それも見逃す事は出来ないわ。多分、銀時に何としても実験させようとしているから』

打ち止めの誘拐とともに芳川からそう言われたからだ。

だから、打ち止めの救出を垣根に頼んだ。本当は自分が行けばいいのだが、銀時と妹達がまた関わってしまうと言うのならばとこちらの殲滅を優先した。

高杉にも連絡したが、まさかこちらに協力してくれるとは思わなかった。

それに初めて名前を言われた。

それを思い出して笑みが零れた。芳川にも連絡をすると彼女も意外そうに聞いて承諾した。

それに

他の組織が関わっているかもしれない。一人で大丈夫？と心配されたが、大丈夫と答えた。

「身体がボロボロになろうが、魂尽きるまで私は止まらない」

懐から何かを目の前の研究所に投げた。そして

ドゴオオオオオオオオオン!!!と爆発音が響きわたる。

その音に反応した黒いヘルメットに全身黒い武装した連中がゾロゾロと始めた。

心理はその連中を見た時があった。昔、銀時と心配を襲ったかつて木原が率いていた猟犬部隊（バウンドドック）だった。「リーダーを失った鳥合の衆よ。私が還る場所に還してあげる」右手に銃、左手に刀を持って猟犬部隊に突っ込んで行った。

「たかが、ガキの女一人だっ!!う、撃てええええ!!」
ダダダダダダダッ!!

その合図と共にマシンガンを連射する。
だが。ドチャッと何が近くで落ちた音がした。

男はそれを見ると

「ひっ!!」

悲鳴を上げた。落ちた物は仲間の首から上にあつたものだった。ズシャ、グチャなどと生々しい音が響く。仲間が次々とたつた一人の少女に殺されていく。

「この化け物があ!!」

がむしやらに撃ち続けると心理の肩に当たつたようだった。

「死ねええええ!!……っえ?」

チャンスだとばかりに撃ち続けるが、自身の身体にも異変があつた。

ジワリと腹の辺りが熱い。そう思つて見ると

「あ、ああああっ!!!」

血が大量に流れて!いた。知らずに男も撃たれていたようだった。その背後から刀を首につけられていた。

「……痛いわね」

声が出せない。周りを見ても自分しか生きてはいない。

死体だらけの血の海を男は目の当たりにした。

「た、助けてくれえっ!!!」

「……そうね。助けてあげる」

ズシャッと一気に刀を引き抜いた。

「……え?」

ブシャアアア!!!と首から血が流れていく。

「これから一人で生きていく苦しみから解放してやってあげたのよ。」

助かったでしょ？」

男が最期に見たのはニコツと笑う、どこにでもいそうな表情をした少女がいただけだった。

事が大きくなる前にてつとり早く済ませるのが一番

総合センターの中にあるデスクワークに四人の少女達はモニターを見つめて硬直した。

彼女らはある研究しているこの場所の護衛を任されていた。外には使い捨ての猟犬部隊が見張っていたはずだったのだ。

だが、それはたった一人の少女によって壊滅させられた。いくら使い捨てとは言え、暗部組織の一つだ。それなりに役立つ筈が一瞬で一人も居なくなってしまった。

それを実行した金髪に赤いドレスの姿は見た事がある。

「……こんなの聞いてないわよ……」

レベル5である麦野沈利ですら冷や汗をかいて頭を抱えた。

何の実験をしているかも知らされていない。

ただ解るのは侵入者がもっとも相手にしてはいけない人物だったからだ。

第一位の一方通行である坂田銀時の妹。

暗部組織「スクール」の幹部、坂田心理だった。

総力ではこちらに部がある。彼女を殺す事は出来るだろう。それ相応の犠牲も伴うが。

だが、彼女に繋がりがある奴ら黙ってはいないだろう。

闇に生きながら光に溶け込みつつ有る第二位で心理のリーダーである垣根帝督。

最近、心理の妹になったという情報が入った第三位の御坂美琴。

そしてやはり一番は心理の兄である最強の超能力者で最強の侍とも言える坂田銀時。

この最強の3トップが動いてくるのは確定だろう。そうならば「アイテム」は速攻で壊滅する。

モニターを見ながら麦野達は沈黙。誰も口から声を出す事が出来なかった。

モニターでは心理が器具とともに研究員達を壊している。

護衛は何をやってるんだ!?

何故来ない!?

と慌ただしくしている。

『まだ妹達を利用しようとしている馬鹿な人達。貴方達は逃げる事も隠れる事も出来ない。だって、ここが貴方達の墓場だから』

楽しそうに獲物を捕らえて歩く彼女にこちらから見ても不気味過ぎるに笑えない。

心理が来た理由は第三位のクローンにあつたようだ。麦野は

「…兎に角、暫く見てるしかないか…」

険しい顔をして言うと、他のメンバーも頷いた。

『全く、ここがどこ解らぬと言うのに随分と物騒な音が奏でる場所に來てしまったでござるな』

そして新たな人物もモニターに映し出された。黒い髪をしたツンツン頭で、ヘッドホンにサングラスをして変わった服装をして刀を持っている男がいた。心理は彼は高杉と桂と同じ世界の人間だと、感づいた。

その男は心理と研究員達を見て瞬時に把握し、刀を構えて

「ぐああああ!!」

研究員の一人を斬った。

『…あら、私の味方をしてくれるの?』

研究員は驚きながらも、銃を向けて発泡してくる。

二人はそれを避け、次々と斬り倒していく。

『主の音はどこか、暗く淀んでいるが…拙者にとって眩しいくらい綺麗なあの人の音に似ていたのだな。それに此奴らの音は碌でもない、聴くに耐えない酷いものだ。どちらを味方をすればいいか、なんてのは直ぐにわかったでござるよ』

この男の感性は独特な物で音で人を判断するのかと心理は心の中で驚いた。それにあの人、とは眩しいくらい綺麗な音で誰だかわかった。

言われてみればそうだな、と彼女も思ったからだ。

『坂田銀時』

!!!』

心理が言った名前にも男は思わず刀を落としてしまった。心理はそれに気づいた研究員が銃で狙っているのを見てそれより早く頭を狙って撃ち抜いた。

見事に頭に直撃して絶命した。

『……何故、銀時の名を』

死んだ筈の人間の名前を何処かも分からない場所で聞いたのだ。驚くのも無理はない。

『私は坂田心理、銀時の妹よ。元の姿は分からないけど……この世界で違う人間として生まれ変わったみたいなのよ。本人から聞いた。それに高杉さんから聞いたわよ。貴方達の世界がどんなものなのか』
銀時の妹と名乗った少女はそう言った。ここはつまり、自分の知らない別世界と言うことだ。しかも高杉まで知っていると来た。彼もこの世界にいる事になる。

『晋助もいるのか。つまり拙者の事も?』

『高杉さんが率いる鬼兵隊つてどこにいるんでしょう?また子さんから聞いたの。"アタシがここにたどり着いたつて事は万斉先輩もここに来ているに違いないっス"つてね。貴方がもしかして河上万斉さん?』

『正解であるな。…そうか』

来島また子もいる。納得がいく。自分はまた巡り会える事が出来る。

どんな人間になっているにしても坂田銀時にまた会えるのだから。

『そうそう。コレ、最近撮った写真』

彼女は御守りがわりとして懐に入れていた写真を取り出して見せた。

そこには高杉、また子。それに信女と桂も写っていた。

『この人が私の兄である銀時よ』

心理が指した場所はその四人の間に妹である彼女とその隣にいる白髪の少年。

高杉と引けをとらない悪い顔をした銀時を見て万斉は苦笑した。

『…随分と変わったのだな、銀時』

『でも中身はまんま同じみたいよ』

高杉さん達が言ってたわ

ニコリと笑う彼女に万斉はそれもそれでだなとまた苦笑した。

『私はまだやらないといけない事があるけど、万斉さんはどうするの？』

「拙者も付いて行こう」

万斉は心理ととも行動する事に決めた。

映像から消えたのを見て麦野はため息を吐いた。

「どうやら、私達は碌でもないもんを守ろうとしてたみたいね」

頭を抱えだした麦野に絹旗とフレンダを困り果てた。

クローンの話が出た時点であの実験を諦めていない連中に自分達をお守りに使われようとしているのだ。

「ちっ。胸糞悪いわ。どっちが有利かなんて最初から決まってたもんじゃないの」

そう言つて麦野は立ち上がった。

「この仕事、降りるわよ」

三人に向かってそう言い放った。

立ち入り禁止区内に一台の赤いスポーツカーが停まっている。

その中には身体中に機械を貼り付けられている少女と白衣を着たボサボサの頭をした男。

打ち止めと天井亜雄。

「…ハハッ。ここまで来れば邪魔をする者がいない。このウイルスさえ打ち込めば…」

カタカタとパソコンにウイルスを完成させる為に方式を打ち込んでいく。

あともう少し。

「コレで一方通行も参加せずにはいられないだろう！レベル6を誕生させるのはこの私だ：！！」

方式を完成させ、enterキーに手をやる。

天井は口元を緩ませ、指をそこに近づける。

ドゴンと車に衝撃が走り、それと共に何者かの手によって外に投げ出された。

「ぐうううううう!!?」

思い切り投げ出された天井はアスファルトに叩きつけられた。

「オイ、このクソゴミ屑が」

痛みに耐えながら声がする方向を見る。

其処には真っ白な翼を広げた茶髪の少年がいた。

天井はその正体を知っている。

「第二位：っ!!」

一方通行に次ぐ第二位の垣根帝督が虫ケラを見るような目を向けて立っていた。

垣根は天井を無視して打ち止めを見た。危害を加えないようにした為に無事だった。

貼り付けられた器具を破壊し、パソコンも木っ端微塵にすると打ち止めの頭に手をやる。

「ギリギリ間に合ったか」

ふう、と一息つく。

すると上体だけを起こした天井がこちらに右手で銃を向けている。

「何故：っ!!?闇にいるお前がこんな事をしている!!?そうか！一方通行が絶対能力者になるのが気に入くないのか!!?なら、お前がこの実験に参加してくれれば第一位を超えられるぞ!!」

気が狂ったのか今度は垣根に実験を持ちかけてきた。はあ、と溜息を吐いた後、翼で銃ごと右腕を吹き飛ばした。

「ぎいいいい!!!!」

最早、声も出ない程の激痛にのたうち回る。

「確かにレベル6は魅力的かもしれないねえ。ちっと前の俺なら喜んで受けてたろうな。だが、今の俺にはどうでもいいんだよ」

怠そうに頭を掻きながら、恐怖に陥ってこちらを見る天井を睨む。「散々、虫ケラのように殺してきた俺が言う事じゃねえが…コイツらだって生きてんだ。これからも這いつくばって生きなきゃならねえんだよ。だから、テメエらの玩具にさせるわけねえだろうが」
数え切れない程の人間を殺してきた。だけど、一人は部下になった少女。もう一人は自分より上に立つ少年。
立場は違うのに何か同じ真っ直ぐなものを持っている二人に毒された。

クローンに対してもこんな考えを持つようになってしまった。

「それに後ろを見ろよ。俺より怖いのがいるぜ？」

ククつと自嘲気味に笑いながら天井の後ろを見る。

怯えながらも天井も釣られる。

そこには

「俺の大切なもんに手を出した事を後悔しながら死んでいけ」

左目に包帯を巻いた男、高杉晋助が刀を振りかざしていた。

「ひっ！」

立つ事も逃げる事も出来ずにいると、いつの間にか心臓をピンポイントで貫かれていた。

その為、天井は一瞬で絶命した。

高杉は刀を死体から抜き、鞘に収めると打ち止めを抱き抱える。

「あっけねえな…まあ、ゴミらしい最期だな」

垣根がつまらなそうに呟くと高杉はフン、と鼻で笑った。

「大ごとになってから救ったほうが良かったか？」

嫌らしく言う高杉に

「…いや、それはそれで面倒だ」

少年らしく笑って返した。

少しすると「う、うーん」と抱き抱えられた打ち止めが薄つすらとめを開ける。

「…貴方がミサカを助けてくれたの？ってミサカはミサカはまさか晋ちゃんが来るとは思わなかったって予想外な展開に驚いてみたり！」
「ブハアッ」

打ち止めが高杉の事を晋ちゃんと呼んでいるのを垣根は思わず吹き出してしまった。

耐え切れずに笑っている少年に高杉は睨みつける。

「何、笑ってんだクソガキ」

「い、いやだつて晋ちゃんつて似合わねーな、アンタ!!」

睨まれてるのも関係なく笑っているのに対してチツと舌打ちした。

「…そんなにおかしいかなあ?…つてミサカはミサカは不安げに晋ちゃんを見上げてみる」

少しシユン、とした打ち止めの頭をくしゃりと撫でて

「何もおかしくねえよ。疲れただろ?もう一回寝ろ」

優しい表情を向けると安心したのか、「ありがとうつてミサカはミサカは…」と言いつ切る前に眠った。

「アンタ、ロリコンか?」

「…お前も死ぬか?」

まじ勘弁だと言つて逃げるように飛び立った垣根を見つめてまた舌打ちをした。

そして芳川に連絡をして迎えに来るまでにへこんだボンネットの上座って目を閉じた。

秘めた想いと迫るリミット

「銀時」

銀時、番外個体、神裂の三人が歩いていると番外個体が銀時に話しかけてきた。

「何だよ？」

「どうやら、打ち止めが助かったみたいだよ。晋助の腕の中でお寝んねしてるんだとき。今、把握している個体から情報が入ってきた」

「高杉ねえ。アイツも心理と協力してたんか」

「あと第二位さんもね」

「…メルヘン君もかよ」

打ち止めが助かったと聞いてホツとする。心理の側には高杉が聞いていたようだ。垣根まで協力してたとは思わなかったが。

「心理は別件で妹達を利用しようとした連中を潰したらしいよ」

「流石、俺の妹だな」

うん、うんと唸っているとその妹から連絡が来た。

「おー、ここちゃんお疲れー」

いつもの様子で対応すると

『…銀時か？』

聞いたことのない男の声が銀時の耳に入った。

「……誰だテメエ」

心理ではない男の声が聞こえる。

「何で俺を知っている？心理はどうした？アイツに何かしたってんなら…ブチ殺すぞ」

携帯に力に込める。銀時は暗部の人間だと確信する。

『拙者はお主の敵に回るような事はしないでござる』

拙者？…ござる？…銀時はこの口調に覚えがある。

「……まさか、万斉君か？」

まさかな、と思いつながら尋ねる。

『そうだ…それにしても随分と口調が変わってしまったな』

やはり河上万斉本人らしい。

「まあ…こつちにいたら色々あんだよ。色々とな」

『それと、紅桜の事だが』

「気にすんなよ。また子ちゃんも万斉君は高杉がウジウジしてんのを
見るのを耐えきれなくてやった。ただそれだけの事さ」

たしかに二人が奴らに渡した事で起きた事件だった。それさえ無
ければもしかしたら木原は生きていたかもしれない。

「オマエらは何にも悪くねえよ。悪いのは大切なもん守れなかった俺
の弱さだ」

『銀時…』

自分をもっと木原数多と言う男を分かっていたら助けられたかも
しれない。

そんな後悔の念が今でもある。

「まっ。心理と一緒に早く来いよ。手エ出したら…コロスよ？」

銀時はいつまでも重い話はしたくないので、はぐらかした。それと
妹が心配なので警告する。

『分かったでござる…それと拙者はロリコンではない』

呆れた声が聞こえた後、通話が切れた。

「心理も銀時も二人揃って重症だね」

番外個体はため息を吐いた。

「いや、別に兄貴として普通だろ…？」

「どうせ血は繋がってないんだし…兄妹から夫婦になっちゃえば？相
思相愛だよ？」

はあ!?何言っちゃってんのこの子!?などとテンパっている銀時に
神裂はから笑いをしている。それを見ながら彼女は思う。

(もう、誰も間に入れないくらいにね)

ミサカ達の中には絡みもないのに銀時好きが多い。

打ち止めからの感覚共有で銀時がどう言う人間か知っているから
だ。

それをなんともないように二人の距離は異常なくらい近いと感じ
ている。どんなに離れていても想いは一緒。入れる訳がない。そう
思っても自分の想いは捨てられない。

(ミサカは二人が幸せになればいいと思ってるのは本当だ。けど、銀時を見ると胸が一杯一杯になるんだ…やっぱりミサカは…) さつきだつてそうだ。

心理や高杉、芳川が打ち止めを捜しに行っても自分の意思で銀時側に付いた。

木原が銀時達の側に居させたいほうを選んだからだけじゃない。自分で決めて銀時と一緒に行く事にしたから。

(ごめんね。心理…ミサカはそう簡単に貴方に…誰にも銀時をやりたくない)

それ程までに銀時を好きになってしまったから。

「おーい。どうした急にポーっとして?行くぞ」

「え?う、うん」

銀時の声に現実に戻る番外个体。

(まだ言える自信はないけど、言えたらいいな。そしてこの人に届いたらいいな)

彼女はいつか叶う日を願いながら隣を歩く。

「あ、ツラ」

「ツラじゃない、桂だあ!!ていうか信女殿は小太郎と言ってたよね!」

桂達は銀時達と合流する為に足を進めていたが、また子と信女に遭遇した。

「文字数が少ないし呼びやすいから」

「そんな理由で!?!」

桂はショックを受けたが、すぐに開き直り

「しかし、来島ま「死ねえええ!!」まだ何もぐはあっ!!」

信女の隣にいるまた子の名前を言おうとしたら拳銃で殴られた。

「お前も銀時と同じ事言う前に潰すっス!!」

「痛っ！別に変な…てかそれ殴るもんじゃないから!!」

ギャアギャアと騒ぐ二人を信女は無視してインデックスを見る。

「保護者達はどうしたの？」

「しゃがみこみ頭を撫でた。」

「あんまり子供扱いしないでほしいかも!!」

子供扱いされてプンプンと怒っているインデックス。

だが、彼女を何かに目覚めさせてしまったらしい。

「むきやつ!?!」

インデックスの体ごと大きな胸で抱擁した。

「可愛い。何のこの生き物」

ギューと押しつぶされるように抱きしめられ、苦しそうにしている

インデックスに気づかず癒される信女。

「いや、その子が窒息しちゃうから」

桂をボコボコにしたまた子がそれに気づいて引き剥がした。

助かったと言わんばかりにインデックスは苦しそうにしながらお

礼を言った。

「可愛いのが悪い。心理が抱きしめたくなくなるのがわかる」

納得しながら何処か羨ましそうにしていたが、ステイルを見て近く

にいる美琴に視線を移す。

説明しろ、と目で訴えられた美琴は

「えーつと…」

「…僕が説明するよ」

困ったがステイルが助け船となり、先程までの事を説明をした。

それを聞いたまた子と信女は驚いた。

「ええ…晋助様、キャラ変わり過ぎじゃないっすか…?」

「晋助…銀に会ったお陰で吹っ切れたのかしら?」

二人が驚くのはインデックスの事ではなく、高杉の変わりようだった。

「あんまり、この子の事驚かないんですね」

事前に紅桜後、美琴達によって上条は銀時達の事を知らされているし、また子や信女の素性も理解している。

「まあ……ウチらの世界も非現実的っすからね」

また子が困ったように笑う。

「インデックスって言ったかしら」

「う、うん……」

信女がまた近づく。インデックスは一步退がる。

「銀達を信じてれば大丈夫」

それで上手くいく

インデックスの行動に少しショックを受けたがニコリと微笑む。

また子も頷く。

それを見たインデックスは羨ましいと思った。この人達や高杉は銀時をずっと昔から知っているから離れていても分かりあえる。

心理だっそうだ。この世界の人間なのにこの人達と同じように分かり合っている。

でもいつか、それに負けないくらい銀時と分かり合えたらいいなあと思った。

「うん、ありが……っ?!?!?」

お礼を言おうとしたところでズキッと頭が割れるような痛みが走り、体が崩れようとしている。

「!?どうしたの!?!」

一番近い信女が慌ててインデックスを抱えた。

「ハアツ……ハアツ」

息遣いが荒く、目を開けるのも辛い。

周りも何か叫んでいるが彼女には届かず、意識を失った。

伝染した狂気

目を開けたインデックスは深くて、暗くて、悲しい。そんな暗闇の底にいる。

「何?…ここは、私は確か…」

急に頭が痛くなつて息苦しく気を失つた筈だと記憶している。

「よっ。インデックス」

「へ?」

聞いた事のない声が彼女の名を呼ぶ。

その方向を見ると銀色で天然パーマの髪型。額には鉢巻を付け戦場にもいるような格好をした青年。

そして何より、彼女の知っている少年と同じ紅い瞳で見ているのだ。

まさか、と思った。

「貴方は…」

「ああ…そうだったな。本来の俺の姿、知らなかったんだっけ?」

青年は近寄り、優しく頭を撫でる。

「死ぬ前の坂田銀時だよ。俺は」

そう言つてニンマリと笑う。

「そして…お前の力を引き出す為に呼んだんだよ」

その瞬間ゾワリ、と悪寒が身体中を駆け巡った。

銀時と名乗つた青年を突き放して距離を取る。

「ぎ、ギントキはそんな事言わない!!」

「オイオイ、俺は本物だぜ?偽りはアイツだろうが」

呆れたような顔をした青年は続ける。

「つたくよ、チビ杉もヅラも何やってんだよ。先生を守れなかった挙句、世界もぶっ壊せてない…役立たずな連中だぜ」

高杉や桂を悪く言い始めた事でインデックスは叫んだ。

「っ!!貴方はギントキなんかじゃない!!シンスケやコタローをそんな風に思つてる筈ないもん!!」

銀時はそんな事言う男ではないと

きつと前世だって彼は優しい人だって信じている。

「俺はなあ…お前が思っているほど優しい人間じゃねえよ。俺は先生を化け物にした奴らを許さない。約束を破ったアイツらを許さない。」

そして、そんな奴らに託して死んだ自分自身を許せねえ。

銀時（ニセモノ）だってそう思ってるさ」

ククツと狂気染みた笑い声に震えあがる。これは悪い夢だと願いたい。

「そんな事ない…貴方だってあの人達を大切に想ってる筈なんだよ!!」

だから彼女は必死に信じ続けている。彼の本音ではないと。

あの少年の素がこの青年ならば、そんな言葉など発しはしないと。

「はあ…あんな偽りの世界、何が楽しいんだか。まあいいや」

一瞬、ため息を吐いた後にまたニタニタと笑って近づく。彼女は最悪の方向へと考えた。これは彼の心の中にある悪意で生まれたものなんじゃないかと。自分でも知らない力を手中に収めて支配する気なのではないか。

「…、来ないで…」

逃げたくても身体が動けない。そう考えただけで恐怖で竦んでしまっているからだ。

彼はインデックスの頭に手を当て

「さあ、全てを一緒にぶっ壊そうぜ。インデックス」

その言葉と共にインデックスは闇に堕ちた。

インデックスが倒れる直前に抱えた信女は必死に呼びかけた。

「インデックス!?!どうしたの?!」

叫んでも反応はない。完全に気を失っている。上条達も何が起きたかわかっていなく啞然としている。

「おい、桂あ！赤髪!!どうなってるんすかあつ!!」

また子は桂を無理矢理起こして叫ぶ。

「俺にもわからん。ステイル殿は知っているか?」

桂は冷静な瞳でステイルを射抜く。

「正確にはわからない……もしかしたら本当に彼女の中にある魔術の力が発動するのかもしれない」

こんな事は初めてで混乱している。

もし、そうなら彼女はどうなるのか?

「くそつ。こんな所で問題起きたら流石に不味い……早く神裂達と合流しないと!」

いくら人払いをしているとは言え、何が起きるか分からない以上、ここに立ち止まるわけにはいかない。

「そうね」

信女はインデックスを抱き上げて立ち上がった。

すると、パチリと唐突にインデックスが目を開けた。

「インデックス!!良かつ!!」

信女は咄嗟にインデックスを離して身体を逸らした。

彼女の顔に迫ったのはいきなり出てきた刀の刃。

「んー、斬れると思ったんだけど……すっごい反射神経かも」

声は彼女の筈だが、なんとも禍々しい雰囲気纏っていた。

「でもあつさりすぎてもつまらないよね」

彼女ははつきりと信女達に顔を見せた。真っ赤に染まった瞳に狂気染みたその表情はインデックスの面影が無かった。

「私はね、ギントキの気持ちに気付いたんだよ。本当は自分のした事を後悔しているって」

「何でシンスケ達に託したのだろう、自分がまだ生きてれば大切な人が化け物になるのを止められたかもしれないのに任せた事を後悔をしていたんだよ」

インデックスの言葉に桂が拳に力を入れる。

「……本当に銀時が言ったのか?」

彼女はニツコリ笑った。

「うん。だって私の中の本物のギントキが言ってたんだから。アレはニセモノだって」

「だから誓ったんだ。一緒に全てを壊すって」

「殺気が更に膨れ上がる。彼女の手から炎が出ており、刀にそれを宿した。」

「ねえ。貴方はこの世界の銀の何を見てきたの？」

信女がジツと彼女を見据える。

「嘘に見えた？ニセモノに見えた？そう思うなら貴方はただの大馬鹿よ。貴方は銀の事を何も分かっちゃいない」

インデックスは彼女の言ってる事が理解できないしイライラし始めた。

「うるさいかも。これ、ただの炎じゃないんだよ。全力で出すとき、全部消し炭になるから。それじゃあ、つまらないから抑えるの大変だったんだよ」

彼女は正気ではない。狂ってしまった。戻すには戦うしかない方法はないのか。

「簡単には殺さないかも」

インデックスは尋常じゃないスピードで突っ込んでくる。

近くに居た信女が構える。桂達も援護しようとしていた。

すると、その間に

燃え盛る炎の刀を信女ではない誰かが防いだ。

そしてその炎は少し弱くなっているように見える。

「熱いし、痛いし。でもそれでも俺は君を止めなきゃいけない」

上条当麻だ。刀を掴んだ右手からは血がでて、炎を抑えている。

「幻想殺し、か。完全には消し切れてないね。だってこれは」

「そんな事はどうでもいい」

「異能なのはわかった。消し切れないのも余程強力な力なんだろう？それでも関係ない」

上条はお構えなしに力を入れる。

「君のそれは幻想だ。全てを見てきたわけじゃないけど、銀さんはそ

んな人じゃない。君なら分かる筈だ」

「そんなの戯れ言だよ」

インデックスは意にも返さない態度だが、上条は続ける。

「だったら今、君が抱いているその幻想をぶち壊すだけだ」

右手で刀を彼女から振り解こうとする。

「なら私はそんな君達を消せばいいだけかも」

足で彼の腹を蹴り飛ばした。

「ぐっ！」

思った以上に強い蹴りくらって吹き飛んだ上条は近くにいた信女に支えられた。

「大丈夫？」

「はい、なんとかか…」

美琴達も側により始める。

「私が全滅させるのが早いか、君達が私を殺すのが先か。どっちかな？」

狂った笑みを深くするインデックスは楽しそうだった。